

シー カー
S E E K E R

安部飛翔
HISYOU ABE

在りし日の風景

237

シーカー 本編

7

目次

主な登場人物

フレイヤ

元S級相当探索者。28歳。スレイの泊まる宿屋の女主人。

スレイ

本編の主人公。18歳。類稀なる戦闘能力を持つ剣士。

エミリア

探索者養成学校エルシア学園生徒。18歳。エルフ。

リリア・アルメリア

探索者ギルドの受付嬢。18歳。ギルドのアイドル的存在。

サリア

フレイヤの一人娘。6歳。スレイによく懐いている。

エリナ

晃竜帝国の第二皇女。

ルルナ・グラナリア

探索者養成学校エルシア学園生徒。18歳。アッシュの双子の妹。

ゲッシュ・アルメリア

探索者ギルドのギルドマスター。46歳。リリアの父。

ダンカン

ギルド内の鍛冶工房で働くドワーフ。108歳。

アッシュ・グラナリア

探索者養成学校エルシア学園生徒。18歳。ルルナの双子の兄。

1

扉の軋む音が聞こえた。

腰まで伸びた赤毛と茶色の瞳の闊達な美少女として、迷宮探索者たちの間で人気の受付嬢であるリリアは、扉から入つて来た人物を見て少々驚いた表情をする。

そこにはごく普通の市民が着る黒い布の服と黒いズボンに黒革の靴、そして一般市民では持たないであろう刀を腰に下げた十代後半に見える青年が居た。

身長は一七五センチメートル程だろうか。食事を満足に取つていないのか細身すぎるほど細身だつたが、無駄なく鍛え上げられた肉体を持ち、黒髪黒瞳でそれなりに整った顔立ちをしている。

青年の姿自体は取り立てて珍しい物ではない。
ある者は名前を求める、ある者は富を求める。
ここ迷宮都市アルデリアにおいて、迷宮探索者を志す者は老若男女貧富を問わずいくらでも居た。

数多くの人間が死に、生き残った者が成り上がりつて行く。
この迷宮都市アルデリアはそういう場所であつた。

それ故、迷宮探索者をサポートし、迷宮を管理する探索者ギルドにやつて来る者の中には青年よりも若い者も、装備とさえ呼べない粗末な道具しか持たない者も、いくらでも居た。

今までそんな者達をリリアは探索者ギルドの受付嬢として数多く見てきている。

だから今このギルドに入つて来た青年は特段珍しい存在でも無い筈なのだ。

しかしリリアは、その青年にまるで熟練した探索者が漂わせる風格のような物を感じていた。

どうやらそれはリリアだけでは無いらしい。仕事の斡旋などでの会話をしていた探索者達と職員達、それにギルドの掲示板を見ていた者達も動きを止め青年を見やり、ギルドは何時の間にやら静寂に包まれていた。

だがそれもただ一時のことである。確かに青年の若さでそのような風格を持つ者は珍しいが、こ

こ迷宮都市にはそれ以上の実力者は当然の様に居るのだ。

静寂は何時の間にか消え、また喧騒が戻つてくる。

しかし青年自身は、そんなギルドの雰囲気の変化には特に何も感じ無いらしい。ギルド内を無表情で見回すと、リリアへ向かつて一直線に歩み寄つて來た。

他の者達が興味を失くした後も、何故か暫く青年に目を奪っていたリリアは、目の前に立つた

青年に話しかけられ、ようやく自分の仕事を思い出した。

「探索者として登録をしたいのだが」

研ぎ澄まされた刃の様な静かな声だった。



不意に胸が熱くなり顔が火照^{ほて}たりリリアは、少しばかりどもりながら言葉を返す。

「は、はい。ギルドへの探索者としての登録でございますね？　かしこまりました。それではこちらの書面に必要事項を記入して頂けますでしょうか？」

受付嬢になつて暫く経ち、だいぶ仕事にも慣れてきたと思つていた自分がこんな上擦^{うわざ}つた声を出すなんて、と羞恥に頬を染める。

青年はそのようなりリアの様子を気にも留めずに、差し出された書類を受け取つた。
「失礼ですが、文字を読み書きする事はできますでしょうか？　もしできなければ代筆を致しますが」

今度はいつも通りの調子で詰せ、そこでリリアはようやく落ち着きを取り戻す。

「文字か……大陸共通言語だな、これなら問題無い」

青年が静かに返す。

「さようでございますか、それでは記入をお願いできますでしょうか？」

リリアの言葉を聞くと青年はサラサラと慣れた様子で書類に必要事項を記入していき、最後まで書き終えるとリリアへ差し出した。

「ありがとうございます。お名前はスレイ様、出身はトレス村でございますか。失礼ですが、トレス村とはどの辺りにある村でしようか？　聞いた事の無い名前なのですが」

「大陸北方のシチリア王国の田舎の村だ。ここでは知られてなくとも不思議ではないな」

青年、スレイは特に気にした様子も無く答える。

リリアは多少驚きを感じた。

何しろここ迷宮都市アルデリアは、この世界ヴェスターで最大のセレディア大陸、その最南端の小国クロスマリアの中でも更に最南端に位置しているのだ。

つまりこの青年は野盗や魔物が蔓延^{はびこ}る中、この広大なセレディア大陸北方から大陸最南端までの長旅をして来たという事になる。

「さようでござりますか、失礼致しました。それではこれから探索者登録の審査と、探索者になる為の肉体改造を受けて頂きますので私に付いてきて頂けますでしょうか？」

他の職員の手が空いていないのを見て、リリアは自分が最後まで担当できることに内心喜ぶ。
実はリリアは受付以外の仕事は今までした事がなく、審査と肉体改造については知識として知つてはいても、実際に行うのは今回が初めてだつた。

リリアはカウンターを抜け出し、探索者と会話している他の職員に少し席を空ける旨を伝えると、カウンターの横に設置された扉を開き、スレイに付いて来る様に促して中へと入つて行つた。

スレイは目の前を歩く少女の後に従いながら、ようやくここまで来たかと思いを馳せる。

探索者という者の存在は幼少より知つてはいた。

しかしほんの二年前まで、あの時までは、彼にとつて世界とは自分が住む村だけで、立身出世を

夢見て大陸を旅して回る冒險者や、迷宮に潜る探索者などは決して自分と直接関係のある世界の話では無かつた。

だが二年前に青年の世界の全ては変わった。

御伽噺や小説など本で見て話に聞くだけの別世界のことだったのだ。

強くなる。ただそのためだけに二人の師に剣と魔法の教えを請うた。

そして五ヶ月前、二人の師に少なくとも戦闘訓練の試合では勝てるようになつたスレイは、次の段階へ進むべきだと判断し、二人の師に礼を述べ、更なる力を求め、迷宮都市を目指して旅をする事にした。

刀はその時に師一人より餞別^{せんべつ}に貰つた物である。

剣の師は、本当は大陸北方の島国デイラクでのみ作られるデイラク刀を用意したかつたと言つていたが、流石にシチリアの宮廷騎士団にコネがあつても入手の難しい代物だつたため、シチリアの軍刀サーベルの特別に質の良いものを用意してくれた。

ちなみに刀とは片刃の剣のことであり、切斷力を増すために反りのついてる物が多い。もちろんデイラク刀のみならずシチリアの軍刀であるサーベルにも反りがついている。

サーベルも大陸においては評価の高い刀だが、デイラク刀はその名の通り剣神フツ^{たてまつ}を奉る島国デイラクの刀鍛冶のみに剣神が与えた特殊な鍛錬法で作られる刀で、美しい刀身とその切れ味は大陸の刀では到底及ばないとされている。

だがそれだけに、その入手は大陸においては困難を極める。今回師が用意してくれたサーベルも、シチリア王国の宮廷騎士団にコネを持つ師だからこそ用意できた、それなりの質のものだと言えるだろう。

刀に魔力付与を行つてくれた魔法の師は、師が使える限りの付与の上級魔法（形状保持や切斷力上昇、重量軽減）を掛けてくれた。

それだけに、この刀は見る者が見ればそれなりの業物^{わざもの}だと氣付くであろう。

現にこの旅の中でも刀を狙つて襲つてきた盗賊は二桁にのぼる。

もちろんそれは、全てこの刀と魔法で解決してきた。

そんな旅を始めて五ヶ月、ようやく彼は目的地である迷宮都市へと辿り着いたのだ。

探索者としての登録のため訪れたギルドで、自分の担当をしてくれたのが自分と同じ年頃の闇達な雰囲気の美少女だつたのには多少驚いたが、この都市ではそう不思議な事ではないだろう。

そう、ここは迷宮都市アルデリア。

どんな者であつても富と名声を手に入れられる、大陸で唯一の、誰もが^{ユメ}野望を見る場所。

もつともスレイは富や名声などには興味がない。自分の起こした事への罪悪感と何とかしなければという责任感から、強さを手に入れる、ただそれだけが目的でこの迷宮都市へとやつて来たのである。

「こちらです」

少女が言う。先ほど名を聞いたところリリア・アルメリアというらしい。

スレイと同じく平民らしき彼女が姓を持つのはやはりここが迷宮都市で、その職員だからであるうか？

リリアが招き入れたのは、誰もいない部屋であった。中央に光り輝く魔法陣があり、その脇には謎の機械装置が置かれている。

「なるほど、ここがそうか」

「はい、そうです。探索者を志している方ならご存じでしょうが、ここにあるのが探索者となる方の現在の力を計り、肉体を改造して探索者としての資格を発行する魔導科学の装置です。あ、むやみに手を触れないようにして下さいね？ この装置一つで小国位なら軽く買えると言われているぐらい高価なものですから。何せ人間の間では魔導科学は廃れ、もはや新しいものを造ることはできないので」

「ああ、わかった」

値段などに興味はないが、もとより何をする気もないので適当に頷いて返す。

「それではスレイさん、この魔法陣の中央に立つて頂けますでしょうか？」

言葉に従い、スレイは魔法陣の中央へと立ち、そのまま静かに待つ。

「これからスレイさんの現時点での力量を計り、多少の肉体改造をさせて頂きます。ご存じとは思いますが、そうしなければ探索者の資格、つまり魔物を倒して魂を経験値として取り込み肉体を強

化してレベルを上げていく事はできません。多少、肉体改造することで違和感があるかもしれませんが決してそれは害のあるものではありませんし、すぐに慣れますのでご安心下さい。なお全てが終わるまでは指一本動かすことも声一つ出すこともできませんが、それも魔法陣の効果なので不安になる必要はありません。心の準備はよろしいでしょうか？」

「ああ」

リリアはスレイの了承の返事を聞いて宣言した。

「それでは始めます」

すると魔法陣が輝きを増していく。事前に聞かされていた通りスレイは全く身動きが取れなくなり、不快な感触が身体を駆け巡る。

自分の全てを_み視られている感覚と、自分の肉体が弄_{まわ}されている感覚。

暫く時間が経つと魔法陣の輝きが弱まり、次第に肉体の自由が戻つてくる。

「え？ 何これ!?」

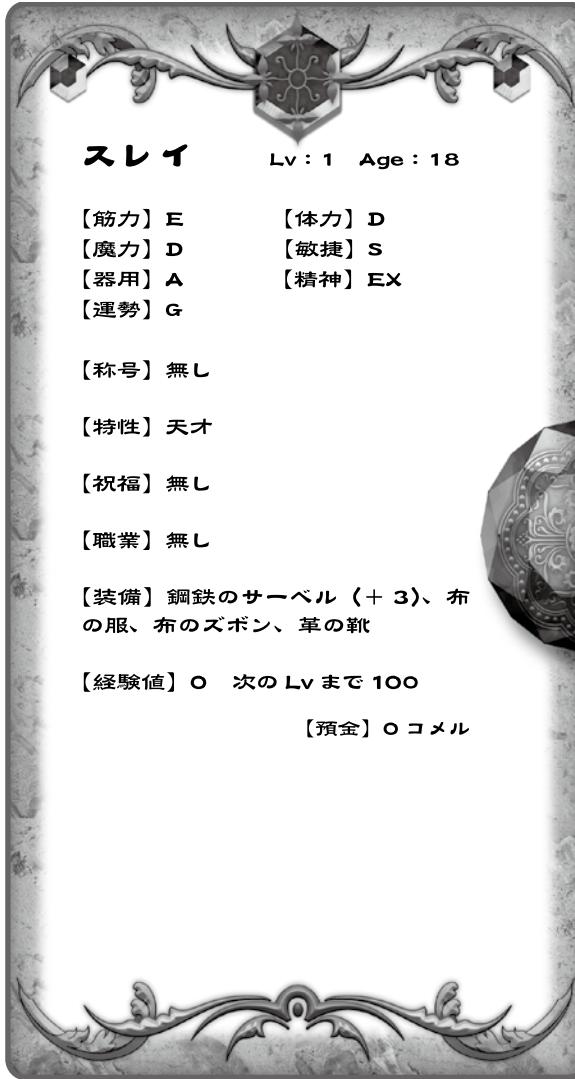
リリアが一枚のカードを見て驚愕_{きょくがく}の声を上げている。

恐らくスレイの探索者カードであろう。

探索者の能力を全てデータとして表示する物だと話には聞いていたが、自分の能力値に何かあつたのだろうか？

スレイはリリアの背後に立つと、自らのものと思われる探索者カードを後ろから覗き込んだ。

カードにはこのような表示がされていた。



「どうした、何か問題でもあつたのか？」

後ろからカードを覗き込んでいたスレイに声をかけられ、ビクツと反応したりリアは恐る恐るスレイの方を振り返った。

スレイを探るようにじつと見る。

見た目はやはり黒髪黒瞳の多少整つた顔をした、細身で引き締まつた身体だが、なんてことのないただの十代後半の青年だった。

いや、その若さにしては少しばかりできる気配を漂わせてはいるが、ただそれだけだ。外見上にその特異な能力値を反映する特徴は何もない。

「い、いきなり後ろから声をかけないでよ！ 驚いたじゃない！」

後ろから突然声をかけられたからだけではなく、近付いた顔に思わず頬が赤くなり心臓の鼓動が速くなつていたため、リリアはごまかすように大声で怒鳴つてしまつた。

「すまなかつた。何やら驚いているようなので少々気になつたものでな」

いきなり怒鳴られて少々戸惑つたように見える反応は紛れもなく十代後半の普通の青年のものだ。何らおかしなところなどない。

そう十代後半の青年、これは問題無い。カードにも十八歳と書かれていてまさに見た目通りの年齢だ。

だがこの青年の能力値はとびつきりに無茶苦茶だつた。

まず能力値のランクというのは最低がGでそれからAまで順番に上がつて行き、そしてその上にS、SS、SSS、EXという、より上位のランクの能力値がある。

ちなみに、EX+というさらなる上位のランクがあるとの眉唾もの話もある。

探索者になる為の肉体改造を受けた一般的な人間の大人の能力値はオールFと言われている。

ところが、スレイは肉体改造をしたばかりでこの能力値。しかも何の神の祝福も受けていないから上昇補正も無しでだ。

筋力のEは探索者に成り立てとはいえ、鍛えられた身体をしているので、順当と言つていいだろう。体力と魔力のDも探索者になつたばかりにしてはかなり高めだが、異常と言う程ではない。

しかしこの敏捷Sと器用Aはどうだろう？ Aと言えば一流の探索者に与えられる評価だ。Sに至つては超一流の領域と言える。

さらに精神のEX、こんなものは伝説級と言つてもいいくらいだ。

精神とは戦闘に対しての精神的な適性を表したものである。

戦闘において動の極致たる狂化を極めたバーサーカーや、静の極致である明鏡止水を極めた聖職者でもせいぜいSSといったところだろう。

この青年が、そんな偏った精神力を備えているように見えない。だから逆に恐ろしい。

さらに運勢のG。運勢とは迷宮探索などに限られた運の補正で、これが良い人間は良いアイテムを手に入れ易かつたり罠にかかるなかつたりする。

逆に、運勢が悪い人間は強力なモンスターとエンカウントする確率が上がる。Gなど今まで見たこともなかつたが、これほどの運の悪さなら邪神とさえエンカウントしても不思議ではない。称号が無いのは、探索者になつたばかりで手に入れる条件を満たしていないので問題無い。

そして特性の「天才」、これが一番の問題である。

見た事も聞いた事も無い特性だ。歴史上天才と呼ばれた者は数多くいるが実際に特性として備えていた者の記録は無い。

そもそも特性 자체、最初から持つ者は少なく、探索者として修行していく内にレベルアップやクラスアップ、あるいは何らかの条件を満たすことで、何時の間にか手に入れているという性質のものなのだ。

祝福が無いという事はどの神からも祝福を受けていない、つまりどの神殿にも属していないということだろう。

通常探索者になろうとする者は神の祝福を受ける為どこの神殿に属するのだ。多少の寄付を定期的に行つて祝福を受ければ能力値に補正がかかるし、探索者としては得こそすれ損をすることは何も無いからだ。

職業が無しというのは探索者になつたばかりということだ。

職業は探索者になつてレベルがある程度上がつた後にクラスアップする物で、初級職として最もなりやすい剣士（剣術に高い補正がかかる）や闘士（格闘術に高い補正がかかる）でもレベルを5

まで上げる必要があるから、探索者になつたばかりの青年に職業はない。

補足するならば初級職としては他に必須レベル10の戦士（全ての武器術・格闘術にそれなりの補正がかかる）、魔術師（全ての魔法に高い補正がかかる）、そして必須レベル15の騎士（全ての武器術・格闘術・魔法にそれなりの補正がかかる）があり、一度初級職を決めるとき、その後の中級職と最上級職は同系と定められてしまう。

- ・剣士→剣鬼→剣聖
- ・闘士→魔闘士→聖闘士
- ・戦士→戦魔→聖戦士
- ・魔術師→魔導師→魔賢師
- ・騎士→聖騎士→神騎士

といった具合だ。

最上級職に関しては、クラスアップの時に何らかの条件を満たせば隠された別の最上級職になるという噂があるが、そのような例はSS級相当探索者や「称号..勇者」といった探索者として最高峰の存在に限られる。そのクラスになるとリリアにとつては雲の上の存在なので、本当の所は分からぬ。

他には生まれつきの職業が勇者という者もいて、彼らは、邪神を封印するための能力を神々から与えられた存在で、皆クロスマリア王国で生まれる。そして、生まれると同時に王国より一代大公位などの位階が与えられる。

昔からクロスマリア王国は「称号..勇者」と「職業..勇者」の者に特権を与えて囲い込んでいた。それ故に小国でありながらも大国と同等の発言力を保持している。

これら的事をリリアは闊達な彼女らしくすさまじい早口でまくし立てたのだが、スレイの返事は落ち着いたものだった。

「それで俺の強さは、現時点ではどのくらいなんだ？」

あまりにそつけないスレイの態度を見て、リリアもやつと落ち着きを取り戻す。

「そう……ね」

リリアは少し考えてから、能力値の内訳と探索者ランクの計算方法を簡単に説明し始めた。
まず先ほどの能力値の種類をまとめるところとなる。

- ・筋力——力の強さ。装備可能な武器の種類などに関係する。
- ・体力——スタミナや頑丈さ。闘気の量や質にも関係する。
- ・魔力——魔力の量や質。
- ・敏捷——動きの速度。

・器用　器用さ。装備可能な武器の種類などにも関係する。

・精神　戦いにおける精神力の高さ。

・運勢　運の強さ。高いと宝などを入手できる確率が上がる。低いと強敵とエンカウントする確率が上がる。

そしてそれぞれの能力値のランクは次のように数値換算できる。

・ EX+	11
・ EX	10
・ SSS	9
・ SS	8
・ S	7
・ A	6
・ B	5
・ C	4
・ D	3
・ E	2
・ F	1
・ G	0

この数値に基づき、全能力値を合計した数値によって探索者のクラスが決まるのである。

・ EX十級相当	74
・ EX級相当	67
・ SSS級相当	60
・ SS級相当	53
・ S級相当	46
・ A級相当	39
・ B級相当	32
・ C級相当	25
・ D級相当	18
・ E級相当	11
・ F級相当	4
・ G級相当	0

もつともこれは理論上の話でしかなく、実力者になるほど数値など問題にしない。

それはともかくスレイの場合はあまりに能力値が偏り過ぎている。その為、悩みながらもリリアは告げる。

「この能力値を見る限りアンバランスだけどC級相当の探索者ぐらいの能力と言つて良いんじやないかしら？」

リリアは少々考え込みながらも続ける。

「武器も魔力付与が+3されたシチリア製のサーベルという事だし、この都市の中では大した価値のあるものではないけど、少なくとも初心者の装備とは言えないわね」

最後にリリアは忠告する。

「ただ迷宮探索というのは能力値だけでどうにかなるものじゃないからね。過去に他国で騎士を務めていた探索者が、僅か一日で命を落とした例もあるから、決して過信はしない方がいいわよ」

何時の間にカリリアの口調は接客用から崩れていたが、リリアは気づかず一呼吸置いて話を続ける。

「まずは初心者用の迷宮で探索に慣れるべきね。それと今はどの神殿の祝福も受けていないようだから、受けておくことを薦めるわ。少し寄付すれば迷宮探索が格段に安全になるんだから、やらない手は無いと思うわよ?」

リリアの助言にスレイは一度目を閉じ、再度開くとじつとリリアの目を見つめた。

リリアはその深い黒色に飲まれそうになり、また頬を熱くしながらも何とか平静を装う。

「色々と教えてくれて助かつた、感謝する。だが、悪いが俺は無神主義者なのでな。祝福を受けるのは止めておく」

スレイの探索者登録は終わつた。

拠点となる宿を決め、装備を整える為にスレイは立ち去るうとする。

リリアは思わずスレイに声をかけていた。

「本当に無茶はしないようね！ それと今度来た時も私を担当に指名してね！ 色々とアドバイスしてあげるから！」

スレイはわかったというように頷き、そのままギルドを立ち去つた。

彼の訪れは突然だった。

腰まである明るめの茶色い髪をカールさせ、髪と同じ茶色の瞳をした、今年で二十八歳になる妖艶な美女、宿屋“止まり木”的女主人フレイヤはその日もいつものように仕事をこなしていた。

目の下には泣きぼくろがあり、瑞々しい唇の輝きが色香を感じさせる。

ただ、彼女をその見た目だけで判断するのは危険である。
なにせ結婚前はS級相当の探索者だった凄腕で、結婚して探索を行わなくなつて久しい今でも、

その腕は鎧付いてはいない。

夫を亡くし女一人で切り盛りする宿ということで不埒な事を考える輩もいたが、皆手痛いしつべ返しを受けている。

その美貌で多くの客を呼び込みながらも自らには指一つ触れさせない。ある意味誘蛾灯のような女性である。

そんな彼女がいつも通り宿のカウンターに居ると、黒髪黒瞳のその青年がやつて來た。

服装や雰囲気から、探索者になる為にこの迷宮都市に來たのだろうと当たりを付ける。

富や名声を求め成り上がる為にこの迷宮都市にやつてくる者はいくらでも居る。かつてのフレイヤ自身もS級相当探索者として名を馳せ、更なる富や名声を求めた時期もあった。

しかしこの宿屋の主人であつた夫と出会い、その優しさと心の強さに絆ほだされ結婚し、一線を退いた。そして、幼い娘を残して流行病はやりやまいで死んだ夫に代わり、以来、女主人として一人でこの宿屋を經營してきた。

そのような身の上じょうだからか、彼女は迷宮都市の外からやつて來た青年が探索者となることに厳しくも優しい目線で見守つている。

迷宮都市の中で探索者になるための教育を受けたならともかく、そうでない青年がいきなり探索者となるのはかなりの無謀なのだ。

實際外から探索者になる為にこの迷宮都市へやつてきた者の死亡率は、都市内の然るべき教育機

関を出た者に比べると著しく高い。

もつとも都市の外からやつて來た者でもそれ以前はどこかの国の騎士で元々高い戦闘技能を持っている者もいれば、迷宮都市内の各神殿で、探索者になる為の速成教育を受けている者もいるので、一概には言ひ切れない。

誰もが富と名声を手に入れられるとは言え、要は命をチップにしたギャンブルである。生き残らなければ何も手にすることはできないのだ。

ただどうやらその青年は例外の一人らしい。纏まといつている気配は少なくともその年頃の普通の青年とは異なり、身体も鍛え上げられ、瞳の奥にはどこまでも深く静かな力強さが宿つている。

何もかもを吸い込みそうな瞳の深さにフレイヤはわずかばかり興味を引かれていた。だからこそ宿の帳簿に名前を記してもらい、とりあえず十日分の宿泊費一〇〇〇コメルを受け取つた後で、客に対し普段はしないような問い合わせをしたのだろう。

「フレイさん、ですね？ やはり貴方も探索者になる為にこの都市へ來たのですか？」

「ああ、先ほど登録してきたところだ」

ああやはりと思いながらも、フレイヤはつい尋ねてしまつたことに、僅かに疑問を覚える。

その時だつた。今年で六歳になつたフレイヤの娘——母親譲りの茶髪と亡くなつた父親譲りの碧眼を持つ少女サリアが、宿の入り口からカウンターへと走り込んできた。

「ママーっ！」

サリアは、その勢いのままスレイにぶつかつた。

「きやつ！」

「こらつ、サリア！ 宿の中で走っちゃいけないっていつも注意してるでしょ！ ごめんなさいね
スレイさん、ご迷惑をおかけしてしまって。この子は私の娘でサリアというのですが、いつも落ち
着きが無くって」

「いや、かまわない」

スレイは特に気にした様子もなくしゃがみこむと、サリアに目線を合わせて語りかけた。

「サリアだつたね。怪我はしなかつたか？ 大丈夫ならいいのだが。お母さんの言うとおり、宿の
中を駆け回るのはあまり感心しないな。恐いお兄さんやおじさんによつかってしまうかも知れない
から、気をつけたほうがいい」

「パパーッ!!」

突然だつた。

スレイをじつと見ていたサリアが耳を疑うような言葉を発してスレイに抱きつく。

カウンター近くの食堂に居た客が、驚いたようにスレイ達を見るが、青年が亡くなつた宿の主人
より若いことがわかるとそれぞの話題に戻つていつた。

ただ、一部のフレイヤに氣のある男の客達は気になつてスレイ達の様子を窺つている。

そしてフレイヤは、あることに気付いた。

似ているのだ、スレイは。在りし日の主人に。

若者であることと、鍛え上げられた身体を持つ探索者という先入観から、先ほどまでは気付かなかつたが、スレイの顔立ちや雰囲気は彼女の亡くなつた主人に本当にそつくりだつた。

スレイは抱きついてきたサリアを優しく抱き返し、撫でてあげながら言つた。

「サリア、すまないが俺は君の父親ではない。ほらこんな若さじゃあせいぜい兄と言つたところだ
ろう？」

「お兄ちゃん？」

きよとんとスレイを見つめるサリア。

フレイヤは慌ててサリアをたしなめる。

「こらつ、サリア。お客様に迷惑をかけてはダメでしょう？ 早く離れなさい。スレイさん本当に
すいません」

「いや、かまわない。迷惑ということじやない」

優しく返すスレイに、サリアは嬉しそうにますます強く抱きつく。

「スレイお兄ちゃん!! あのね、サリアと遊ぼう？」

「ああ、かまわない。後でちょっと用事があるから、それほど長くは遊べないがな」

スレイはフレイヤを見やる。

「名前を聞いても構わないだろうか？」

「フレイヤです」

「それでは、フレイヤ。サリアを少し借りる。部屋の番号などは後で聞かせてくれ」

そういうとスレイはサリアを抱き上げて外へと歩いていった。

フレイヤは久しぶりに感じた、懐かしさの様な恋しさの様な胸の高鳴りを抑えきれず、暫しカウンターに立ち尽くしていた。

始まりの迷宮——地下十階（最下層）『試練の間』

「キィーッ!?」

魔物の悲鳴と斬撃音が響き渡る。

スレイは探索者登録から二日目にして、探索者にとつて最初の閥門と呼ばれる『始まりの迷宮』の最下層『試練の間』まで潜っていた。

ちなみに一日目は拠点となる宿屋を見つけてその女主人の娘と暫く遊び、その後は軽く装備を整えるだけで終わった。その時に路銀は尽きて今は一文無しだ。

宿は一泊一〇〇コメルと安宿とは言えないが、主人のフレイヤは美人であり、元探索者というのも何かと都合がよかつた。それに何故かサリアという可愛らしい娘も妙にスレイに懐いているよう

であつた。

そういうわけでスレイは、当座その宿を拠点としてすることを決めるに、十日分の宿泊費をまとめて払つた。

もつとも、今までの経験から、自分なら中級探索者程度は稼げるだろうから、十日も猶予があればどうともなるだろうという算段もあつた。

ちなみに、この世界における探索者の収入は、初級探索者の平均的月収が一〇〇～一万コメル、中級探索者が五万コメル前後、上級以上の探索者になると一〇万コメル以上と言われている。

いずれにせよ、探索者として登録したばかりのスレイは、その実力はともかくとしてこの初心者用の『始まりの迷宮』から始めなければならない。

それにしても「始まりの」というだけあってここは、舗装された通路に、整えられた石壁や天井、光源は不明だが何故か明るい内部。出てくるモンスターは、浅い階層ではG級かF級クラスで、深い階層でもE級までであった。

その為、スレイは全てのモンスターをあっさりと難ぎ倒して行き、尋常ではないスピードで最下層までやってきていた。

しかしいくら初心者用の迷宮とは言え、初めて迷宮に潜ったその日に、しかもこの速さで最下層まで降りて来られる者はそうはない。